

MSC クルーズ 2019



2019年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

テレビショッピングの「ジャパネットたかた」がクルーズ業界に参入して間もないが、今回私たち夫婦はそのジャパネット・クルーズで10日間日本一周の船に乗った。この会社は何かをやってくれるだろうと期待しての乗船だ。

第一章 出航

■ジャパネットのクルーズ

今年の春先のこと、ダイヤモンド・プリンセスの船旅の旅行記を執筆中に何気なくテレビを見ていたら、「ジャパネットたかた」のクルーズ企画があることを知った。

MSC というイタリアの大手クルーズ会社の船をまるごとチャーターしてパッケージツアーとして販売するというもので、あの独特の声と言い回しで「ジャパネットならではのクルーズ、これもあれも付けて〇〇円、さらにお値打ち価格！」というもので、船内のアルコール、チップ、サーチャージ、出入国税、ポートチャージ、サービス料等々諸費用も全て込みのオールインクルーシブの価格になっている。

妻が私に「面白そうね」と言ってきた。

私は「そうだね、テレビショッピングとクルーズの客層が似ているからね」と答えたが、正直あまり乗り気ではなかった。それでも使用される MSC の船には乗ったこともないし、仕事柄そんな船旅もいいかも知れないと、キャンセルはいつでもできるのでとりあえず申し込んだ。

申し込みは電話を掛けてクレジットカードの番号を教えてその場で決済された。後日段ボール箱で資料が送られてきた。まるでテレビショッピングで注文した品物が届いたような感覚である。

通常のクルーズとは申し込みの段階から全く違うから、これは何か起きそうな予感がした。

そして今、横浜港から出港しようとしている船のレストランで私と妻は横浜ベイブリッジを見てのんびりとビールを飲んでいる。そう、このクルーズはアルコール飲み放題だ。

■MSC スプレンドィダ

私たちが今乗っているこの船は MSC という会社の「スプレンドィダ」というパナマ船籍のイタリア船である。

大きさは13万8000トン、全長333m、全幅38m、デッキは16階までである。就航は2009年なのでちょうど10年で、一般的に客船の寿命は40年くらいなので人間で例えれば青年期にあたるのだろうか、油が乗り切っている良い時期だろう。

乗客の最大定員は4363人だが、レセプションで聞いたら今回の航海では約3300人乗っているという。加えてジャパネットの社員も100人程乗っている。そんな人数と一緒に日本を一周するのだからそのスケールは凄い。



MSC スプレンドィダはカジュアル船というランクの船で、大衆向けなのでクルーズ初心者には敷居も低く乗り易い。

ちなみにクルーズ船の格付けは3段階あり、最も高いのがラグジュアリー船でクルーズ船全体に占める割合は4%しかない。その次はプレミアム船で全体の12%、その他カジュアル船で80%強になっている。

■船内探検

私は飲み放題のビールを一杯に留めて、早速船内探検に繰り出す。

通常のプールの他に全天候型プールやジャグジー、ジム、カジノ、バーなどクルーズ船に必要な施設はひとつとおりそろっている。

ただ何か足りない。

そういえば出航前なのに音楽がない。一般的にクルーズ乗船時にはエントランス付近で船専属のバンドによる生演奏、あるいは優雅に弦楽四重奏などがあるのに、全くないのも珍しい。

その辺りがカジュアル船なのだろうか、それでも私が過去に乗ったカリブ海クルーズのカジュアル船「マジェスティー・オブ・ザ・シーズ」ではクルー総出の盛大な歓迎セレモニーがあったが、それもない。3300人の乗客の入れ替えに忙しくてそれどころではないのかも知れない。

その理由は、ジャパネットはこの船をチャーターして春夏3回ずつ同じコースを航海しているが、本日は私たちの乗船と前のクルーズの下船が重なっており、船にとっては一番忙しい日になっている。



散策していくとジャパネット・ライブラリーという青山ブックセンターとコラボした図書室がある。約1000冊あると聞いていたので期待していたが、実際に行くと、え、これだけというもので、興ざめする。

これもカジュアル船の宿命なのだろうか、どうしても半年前に乗ったプレミアム船のダイヤモンド・プリンセスやラグジュアリー船のクイーン・エリザベスと比較してしまうので致し方ないかも知れない。

それでも、ジャパネットなら何かあるだろうと期待しての出航になる。

■最初の晚餐

夕食はビュッフェスタイルのレストランで気ままに食べても良いが、やはり夕食は船旅のメインイベントなのでコース料理を食べたい。コース料理を食べるレストランは、テーブル番号も含めてあらかじめ指定されており、私たち夫婦は8人掛けのテーブルに案内される。

私たちが先に席について待っていると少しして残りの6席にウェイターに案内されたカップルが次から次へとやって来る。皆やや緊張気味の顔をしている。

「こんばんは、よろしくお願いします」と各々軽く挨拶を交わす。どうやら同じくらいの年齢の夫婦らしい、以後このクルーズ中にこのレストランで夕食をとる場合は必ず同じテーブル、同じメンバーになる。

通常はクルーズの予約時に何人掛けのテーブルとか指定できるが、今回はテレビショッピングのような予約だったこともあり何も指定しなかったが、運よく8人掛けのテーブルをみつらえてくれた。

そしてこの夕食メンバーが今回の船旅を一層盛り上げてくれることになる。

そのメンバーはM夫妻、T夫妻、K夫妻で、皆それなりに経済的にも時間的にも余裕がありそうな人たちで、どの夫婦にも孫がいるというからとても会話がはずむ。

聞くと私たち以外6人は今回がクルーズ初体験だという。改めてジャパネットの集客力を感じることになる。

■終日航海日

翌朝、いよいよ航海が始まる。

午前中からビールやワインを飲むカップルが実に多い。それも紳士淑女たちで、このような人たちが早い時間からアルコールを飲むという光景はあまり見たことがない。

そして彼らの笑顔が実に気持ち良く感じる。

船旅に出た解放感から非日常を楽しんでいるのだが、やはりこのジャパネット・クルーズの特色であるアルコール飲み放題の威力だろう。

10 日間程度のショートクルーズでは終日航海日にはドレスコードでフォーマルが指定されることが多い。この船にもドレスコードがあり、本日はセミフォーマルになっている。

このセミフォーマルという言葉が判り難い。誰かが乗船前にジャパネットに電話で聞いたところ、結婚式に参加するような衣装で良いと言われたというが、それもまた分かり難い表現で不評をかつている。いっそ男性はスーツにネクタイ、女性はそれに準じるドレス、スーツ、着物とした方がよっぽど分かり易い。

クイーン・エリザベスの旅行記でも書いたが、男性のフォーマルつまり正装とは大きく 3 つのレベルに分かれていて、最も格式が高いのが燕尾服（えんぴふく）とモーニング、次がタキシード、そして結婚式や葬式の一般参列者が着る黒い略礼服になる。ただモーニングは名前が示すように夜着るものではないので結果的にはフォーマルデーの正装とは燕尾服、タキシード、略礼服になる。

セミフォーマルというと略礼服の更に下なので、通常のスーツやジャケットにネクタイを着用する程度になる。

さて今回のクルーズでは、妻が持ってきた衣装に注目である。

それは先日 88 才になった妻の母親が米寿の記念に自分の赤い襦袢を再利用して自ら作ったスーツである。赤といっても朱色に近い鮮やかな赤で、さすがに日常的に着るのは勇気がいるので、クルーズならば着てもいいだろうと今回娘に託されたという訳である。

真っ赤なスーツを着た妻の写真を撮ってから夕食のテーブルに行くと同席のメンバーのご婦人たちからは絶賛の声が上がる。馬子にも衣装、お世辞にしてもありがたいものだ。



夕食後に、メンバー 8 人でカラオケを歌いに行くことになる。

M 旦那と私が 1 曲ずつ歌う。M 旦那は積極的で明るい人で「ちょい悪オヤジ」という感じのキャラクターで、一見テレビ局のプロデューサーのように見える。

それにしてもみんなノリがいい、このクルーズは面白くなりそうだ。

第二章 函館、秋田

■函館寄港

今クルーズは日本一周という触れ込みで、横浜を出て太平洋を北上して反時計回りに日本各地の港に寄港する予定になっている。

本日は最初の寄港地の函館に入港し、有名な函館の朝市に立ち寄る。似たような市場は日本各地にあるが、ここは規模も大きく活気もあり、何となく爽やかな感じがする。

なぜ爽やかに感じるの、店の人それも若い人たちが「買ってねー」と北海道弁で声を掛けてくる。カーリング娘で流行語になった「そだねー」と同じ感じなのがとてもよい。

朝市から海に向かうと青函連絡船の摩周丸があり、そして赤レンガ倉庫街に至る。これらを称してベイエリアと呼んでいるが、ここはお洒落なエリアになっている。

半年前クイーン・エリザベスで函館に寄港した時は、有名な湯の川温泉で相当熱い温泉体験をしたが、今回は地元色の強い谷地頭（やちがしら）温泉に行く。

谷地頭温泉は公営の温泉施設のための温泉地で、その入浴料金は 420 円と安い。私は券売機で入浴券を買い、受付に出すと「ジャパネットさんは割引になるので、100 円バックします」という。ここは函館市営の施設なので、ジャパネットは函館市まで動かしてしまうのかと驚く。それにはジャパネットの少しでも安くという商売の姿勢が伝わってくる。



温泉は茶褐色の高温源泉で、高温だからなのか温度の異なる 3 種類の湯船がある。一つひとつの湯船も結構な広さで一つの湯船で 30 人くらいは入れるだろうか、その他に露天風呂もありその形は函館の有名な五稜郭をかたどった 5 角形になっている。私の好きなサウナもあり、水風呂は適温の 17°C くらい、水浴槽も大きく気持ち良い。サウナ通の私をうならせる。

こんな温泉を毎日安く利用できるとは実にうらやましい。私の頭の中では一週間の滞在旅行の企画が浮かんでくる。

■100 円レンタカー

翌朝、秋田に入港する。秋田ではレンタカーを予約しており、港まで車を持って来てもらうことになっている。

乗船前に調べると港の周辺にレンタカーの営業所がない。それでもインターネットであれこれ探していると 100 円レンタカーというレンタカー会社を見つけて、電話で交渉した結果、港まで車を届けてくれるということになった。

なぜ 100 円レンタカーなのかという 10 分間 100 円という料金体系になっているからで、だから 3 時間借りても 1800 円で済んでしまう。もちろん 10 分間でも借りられる。店に代わって宣伝すると、船旅のような短時間利用には持ってこいのレンタカーで全国に 350 店舗もあるのもありがたい。

現れた 100 円レンタカーのお姉さんはテキパキと、私の運転免許証の写真を撮ってその場で手続きを始まる。

「どこ行くの?」「地図は持ってきたの?」と立て続けに質問が続く。男鹿半島に行くと言うと男鹿半島のパンフレットと地図を渡され簡潔に説明してくれる、ここまで小回りが利くのかと嬉しくなってくる。

これはもっと宣伝してあげないといけない。

■男鹿半島を回る

男鹿半島を回ろうと思ったのは妻がまだ行ったことがないというからで、まずは突端の入道岬を目指す。

男鹿半島は寂しいところだ。

海岸線を走ると自然がいっぱい、そう書くと手付かずの大自然を想像するが、実態はかつて人が住んでいたが過疎化により自然が復活した結果で、寂しさが漂っている。

そんな時に、目にした看板には「ここから先はガソリンスタンドがありません、給油忘れずに!」と書いてある。私は「えー、まだ半島の付け根で、入道岬まで相当あるよ!」思わず叫ぶ。

幸いにもレンタカーはガソリン満タンなのでガス欠の心配には及ばないが、ガソリンスタンドがないということはコンビニや商店もないことを覚悟する。

寂しい海岸線を走り続け、日本の渚 100 選の鶴ノ崎海岸というのを見つける。海底の岩が露出する浅瀬が 200m 程続くという名勝らしいが、海水浴シーズンならばとにかく今は人もほとんどいない。腰をおろして海を眺めている老人の後ろ姿が寂しさを伝えてくる。

入道岬に到着する。大きな駐車場もあり大型観光バスが 3 台も来ている。よく見るとジャパネット・クルーズのオプションツアーのバスだ。私たちの船が寄港しなければこの 3 台にも出会わないのか。

駐車場の前には食堂や土産物屋が 10 軒程あるが、本日は平日で半分くらいはシャッターを下ろしている。いや休日でもそのシャッターは開く感じがしない。それでもここは今まで走ってきた海岸線の中では最も活気がある。



入道岬は半島の先端なので灯台があり、岬全体は崖の上に広い草原が広がっている。草原の先の断崖の下には荒々しい日本海が広がっており、風がきついので大きな木が生えておらず、草原の真ん中付近に北緯 40 度のモニュメントがある。ここは南北朝鮮の軍事境界線の 38 度線よりも高緯度にある。

断崖、草原、強い風というこの光景に私はある岬を思い出す。

それはユーラシア大陸最西端のポルトガルのロカ岬だ。ユーラシア大陸と東北地方の違いはあるもののどちらも最西端だ。太陽が沈む西の果てという独特の寂しい雰囲気は共通している。それでも晴れた日にはきっと夕陽が綺麗に違いない。

■なまはげ

男鹿半島内陸に入る。

なまはげラインという道路になまはげ大橋が架かっていて、なまはげ直売所まである。直売所ではなまはげを売っている訳でもなく野菜や特産品を売っているのに、なまはげと称している。なまはげのオンパレードになっている。

男鹿半島は名物や名所が少ない。

2108年なまはげがユネスコ世界無形文化遺産に登録された。恐らくそれを機に付けられた名前なのだろうが、それほどなまはげに頼り切っていると私は少し驚きちょっとガッカリする。

なまはげは鬼であるが、それも地元根付いた良い鬼である。その鬼に救いを求めるのは決して間違っていないが、何でもかんでもなまはげでは節操がない。何しろ大晦日にしか現れない鬼なのに一年中登場したのではご利益も少ないだろう。それでも頼らないといけないというのが現実なのだろうか。それほどに男鹿半島は寂しいところかも知れない。

男鹿半島のほぼ中央に最高峰の本山（標高 715m）があり、本山の双子峰のように真山（標高 567m）がある。その真山は信仰の山で、男鹿半島各地のなまはげはその真山が発祥という。そして長い年月をかけて地域毎になまはげも微妙に変化して、結果として男鹿半島には何十種類ものなまはげが存在しているという。

真山頂上に真山神社奥宮、登り口に真山神社があってその近くになまはげ館という資料館がある。私たちはそのなまはげ館を訪れる。

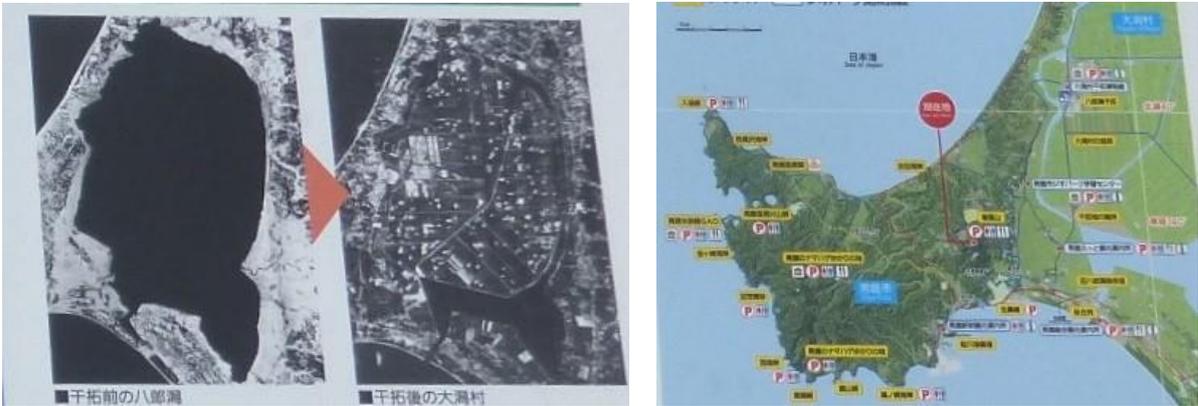
なまはげの説明はもちろんのこと男鹿半島各地で実際に使用されていたなまはげが展示してある。その数 150 体ということで実に壮観だ。その 150 体のなまはげは顔かたちが微妙に違っている。不思議なことにそれらの雄姿を見ていると、私はウルトラマン兄弟を思い出してしまう。



■八郎潟と寒風山

男鹿半島の付け根付近に寒風山という標高 355mの山がある。私は八郎潟の干拓の後を見たくて、寒風山頂上を目指して車を走らせる。

八郎潟の干拓のことを知っている人は少ないが、私が生まれた翌年の 1957 年から干拓が始まり、1997 年に全ての工事が終えた。干拓する前までの八郎潟は琵琶湖に次ぐ日本で 2 番目の広さの湖であった。



この干拓地の最大の特徴はその広さであるが、それだけではなく干拓された農地全てが海面下にあるというのも実は隠れた事実で非常に興味深い。

もともと八郎潟の湖底は周辺の海の底くらいで、従って湖底は海面下にある。干拓事業は水を抜き、土を盛ることなく農地にしたので標高はマイナスになっている。

それはこの干拓事業を海より低い国オランダの技術協力で行ったことにも関係しており、技術協力といっても無償ではなく技術協力費を払うという、第二次世界大戦のオランダへの賠償問題絡みという複雑な事情があった。しかしただ賠償金を払うのではなく、大規模干拓により日本を復興発展させたという先人たちの知恵であった。



大潟富士という山がある。人工の山で富士山に似せて円錐形にして、周囲の土地に対して高さを富士山の 1/1000 に相当する 3776mm として、山頂の標高が 0m となるように造られた。結果標高 0m の山ができたが、残念ながら人工山なので国土地理院の地図には載っていない。ちなみに日本一低い山は宮城県仙台市の日和山（標高 3m）である。

広く、低い八郎潟を寒風山から見ることができる。もちろん 360 度の眺望なので日本海や真山も拝める。寒風山という名前が示すように寒い風が吹いている。ここに立って痛烈に感じることは男鹿半島の自然は本当に厳しく、そして寂しい。

■ 30 分遅れの出港

秋田港出港に際して埠頭で出港イベントとして警察音楽隊の演奏があるというので、私たちは 16 時出港の 15 分前に埠頭を上から眺める船の 14 階のレストランの窓際の席でそのイベントを見ていたが、いっこうに出港する気配がない。

すると船内放送が流れてキャビン番号〇〇番、△△番、××番、◇◇番、□□番の方は直ぐに出国手続きに来て欲しいというアナウンスが 2 回流れる。多くの場合、船では入出国手続きをするために係官が乗ってきて船内で手続きをする。

16 時になっても下船タラップが降りたまま、その時に 2 名の乗客がそのタラップ目掛けて走ってくる。乗り遅れる寸前ながら、彼らは滑り込みセーフだ。しかしその後も船は動かない。警察音楽隊の演奏はまだ続いている。

最終的には 30 分遅れで入出国管理の係官が下船し、船は出港する。まだ来ない乗客を待っていたのか真偽の程は定かではない。

別の船で聞いた話だが、離岸して引き返す場合には 500 万円かかるという。だから乗り遅れたら自力で次の寄港地に行かなければならない。

船旅の最大のリスクは乗り遅れである。そのリスクの高いレンタカーを私はあまり使用しないのだが、今回は多用している。

第三章 日本海を航る

■ 予定変更

秋田でなぜ出国管理の係官が乗って来たかという 5 日目が金沢入港の予定であったが、このまま行くと金沢近海で台風と遭遇するのでそれを避けるために遠回りすることになり、金沢に寄港せずに次の寄港地の韓国釜山に直接向かうという行程変更が 2 日前に発表されていた。

従って本来は釜山に向かう前に金沢で出国手続きをする予定だったが、変更されて秋田で出国手続きを行うことになった。そのために秋田で係官が急きょ乗ってきた。

その行程変更で迷惑をかけるということで、船から 50US ドルのオンボード・クレジットをサービスするというを船室に配布された行程変更のお知らせの書面の中で、小さな文字で書かれている。そしてその 50US ドルはもしも乗客が船内で使用しなければ権利を放棄したものとすとも書かれている。

このことを夕食時にいつものメンバーに話すと知っていた人は誰もいない。そのままにしておけば 50US ドルは使用せずにもらえないことになる。従ってメンバーからは感謝されたという訳だが、この 50US ドルをもらうことができたのは 3300 人のうちどれ程なのだろうか。

早速夕食後にメンバー全員で 50US ドルを使うために船内の土産物店に繰り出す。

おっと、M 旦那と K 旦那はカジノに向かっている。あぶく銭なのでそんな使い方良いかも知れない。そして後で戦果を聞くと案の定、儲かったというから素晴らしい。

■台風

朝起きたら、かなり船が揺れている。台風を回避するといっても影響は少なからずあり、表に出ると真っ直ぐ歩けないほどだ。恐らくは昨晚から揺れているのだろう、レストランのテーブルに置いてある胡椒と塩の入れ物が何個か床に落ちている。

カメラの GPS 機能を使って今居る場所を調べようとしたが GPS の電波が入らないというメッセージが出ている。



そんな北の方まで来たのだろうか。北朝鮮に近いところまで来てしまったのだろうか心配しつつも、そんな事態にワクワクしてくる自分に気が付く。

クルーに聞くと船のレセプションの前に現在の船の位置が出ているというので、行ってみると現在の船の位置は日本海のほぼ真ん中にある。北緯 40 度の男鹿半島よりも少し北に上がって回り込んだようだ。

このジャパネット・クルーズは同じ 10 日間のコースを 3 回まわるので、前回の航海でも台風の影響で函館と佐世保に寄港できなかったということをレストランで隣に座った人が話してくれる。

安全最優先からすれば当然だが、寄港地は経済的に打撃だろう。3300 人も上陸すると大そうなお金を落とす。函館でも秋田でも 100 台近いバスがチャーターされて街までのシャトルバスやオプションツアーに使われ、タクシーやレンタカーも結構な台数になる。昼食や土産物というように経済効果は数千万円になるはずだった。

船、そしてジャパネット側も大変だろう。寄港しない場合にはチャーターしたバスのキャンセル料もあるだろう、オプションツアーの代金は全額返金するから損害も大きい。2000 人くらいがオプションツアーを利用しているとして平均 2 万円とすると 4000 万円の返金だ。

■釜山の港

台風回避のクルーズの翌日釜山に寄港する。

ここには半年前にも訪れており、今回は港の周りを散策することにする。

私の目に留まったのは埠頭にあるキャンプ場で、私たちの船が接岸している直ぐ隣に 40 張くらいのテントサイトがあり、船からは 50m くらいしか離れていない。敷地は土ではなくおそらくはコンクリートで、その上に砂利が敷いてある。土曜日なのでキャンパーも多く来ていて、楽しそうにテントを設営している。

それにしてもキャンパーたちは何を楽しみにここに来るのだろうか。夜になると船も出港し、残るのは港の灯りや潮の香りだけだ。



私は、テントを設営するキャンパーたちを見ながら、しばらくの間考えていたが、これも案外面白そうなキャンプになるのかも知れないと思いはじめた。

何も自然の中に身を置くことだけがアウトドアではなく、屋外で非日常を楽しむことができれば良いのだと。さらに海や船というものに旅のロマンを感じながらのキャンプはなかなか素晴らしい環境なのかも知れない。私も近々そんなキャンプを試してみたくなってきた。

■ ジャパネット・クルーズの3つの特徴

クルーズ中盤になりいろいろなことが分かってくる。私が感じたこのクルーズの特徴は3つだ。

私たち夫婦以外の夕食メンバーはクルーズ初心者、他の乗客にも色々な場所で聞くとほとんどクルーズ初心者という答えが返ってくる。恐らくは9割くらいがクルーズ初心者という感じだ。

ジャパネットの持つ安い、安心というイメージが初心者でも参加し易くし、あの独特の言い回しに、良い意味で騙され乗船して来たのだろう。ジャパネットがクルーズの敷居を下げてくれた。

次の特徴は、乗客のほとんどは日本人だということだ。テレビショッピングでは日本人相手に商売しているのだから当たり前なのだが、こういう船は本当に珍しい。

利益を得るためにカジュアル船は多くの人を集めなくてはならない、そうすると外国人それも中国系の人が多くなるのは昨今の常識だろう。それは国内の観光地を見れば容易に想像できる。

そして3つ目はやはりアルコール、ドリンク飲み放題、ジェラート食べ放題だろう。

この飲み放題が新しい人間関係を作ることに大いに貢献していると思う。気楽に一杯飲めるので初対面でもすぐに打ち解け合えるという点は大きい。あるいは長年連れ添った夫婦でも朝や昼から一緒にビールを飲んでゆっくりとした時間を過ごすとなんだか新たな発見にもつながる。

■ ジャパネット・オークション

ジャパネットならではの催しだろう。ジャパネットが品物を提供し、売り上げは全額寄付するというオークションが1400人収容のシアターで開かれる。行ってみると会場はほぼ満席だ。

しかし見ていると、テレビショッピングで売っている家電品などの商品が出てきてセリ落とししていくので、価格の相場が分かっており驚くような価格にならない。当たり前の価格なので意外性がなく、セリに参加せずに見ているだけの大多数の乗客にはかなり退屈だ。

このようなオークションでは、値付けのしようがないものがサプライズ価格になるので面白い。例えば船長と会食とか、出港のドラを鳴らす権利とか、そういうものほど買った人には思い出が残り、見ている人も楽しむことができる。

この辺りがジャパネットのモノ売りの文化の限界なのか、そんな功罪も感じる。

■食事

クルーズの楽しみの一つは食事である。コース料理を提供するレストランの料理については正直な感想を述べると、味も含めていま一つというところだろう。肉や魚にしても見た目で食欲をそそる魅力を感じられない。それが証拠に今回のクルーズでは料理の写真は1枚も撮っていない。クイーン・エリザベスでは出された全ての料理の写真を撮っていたことを思い出す。

船内にある有料レストランに行けばもっと豪華の料理が提供されるだろうが、私の主義としてカジュアル船で有料レストランに行くのはどうも気が進まない。

それは大衆酒場に入って高級ブランデーを注文するようなものだと思う。大衆酒場ならばそこでしか味わえない庶民的でうまい酒があるはずだ。

実はこの船にはその大衆酒場のうまい酒に相当するものがある。ビュッフェレストランで食べるピザがまさしくそれで、ピザだから庶民的とは失礼だが、とにかくうまい。



専門のピザ職人がいてピザを提供してくれるので、焼きたてで味も良く、種類も豊富だ。見た目にも魅力的で、私が料理の写真を唯一撮ったのはピザの提供ブースである。

やはりこの船はイタリアの船だということを再認識する。背伸びすることなく、何事もその特徴や強みを活かすことだろう。

■いろいろな乗客たち

両親と娘という親子3人で乗船してきた人たちと同じテーブルになったので話始める。娘の年齢が私たち夫婦より少し若い程度なので両親の年齢は80代だろう。

その両親もやはりクルーズは初めてだが、足腰も弱っているのをこれを最後の旅行にするのだということで娘のサポートを伴って乗船してきた。

ただ話をしているうちに、もっと旅行に行けるような気持ちになってきたと言う。それは恐らく船に乗ったら車椅子や杖をついた乗客が相当多いということを目の当たりにして、自分たちはまだまだ元気な自信が持てるようになったのに違いないだろう。船旅の大きなメリットだろう。

ビュッフェレストランでたまたま隣に座った夫婦が声を掛けてくる。相槌を打ちながら聞いていると、クルーズ船にはかなりの回数乗っているという。旦那がいうには奥さんが10万トン以下の船は乗らないというから今回乗ってきたという。船の大きさがよし悪しを決めるというのは明らかに初心者である。私も最初はそうだった。

このスプレディダには、20年くらい前にも乗ったという。うん、何か変だ。私はちょっと口を挟み「この船はまだ新しいので20年前は無いですよ」

彼は「あれは、15、16年前だったかな？」と隣にいる奥さんに同意を求める。奥さんも「そんなものかしらね・・・」私は2009年就航ということを知っていたが、何も言わずにうなずいた。

さらにクイーン・エリザベスも10万トン以下だから乗らないという。私が「半年前に乗ったけれども快適ですよ。9万トンだから10万トンと同じくらいですよ」と言う。

まさか目の前の人間がクイーン・エリザベスの乗ったことがあるとは予期せぬ事だったらしく、彼はしどろもどろになりながら「今度は乗ってみようかな」などと言い始める。

船にはいろいろな人間が乗っている。

第四章 佐世保、徳島

■潜伏キリシタン

佐世保に寄港する。ここでもレンタカーを借りており、2島巡りの日帰りドライブに出発する。

平戸島には平戸大橋が架かっているので車で渡ることができ、さらにその先にある生月島（いきつきしま）にも平戸島から生月大橋が架かっている。

この一帯は「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」として2018年ユネスコの世界遺産に登録された。潜伏キリシタンという聞きなれない言葉で登録されたが、当時の報道で隠れキリシタンとどう違うのかで話題になった。

江戸時代のキリスト教禁教令下でキリスト教を信仰した人たちを隠れキリシタンと呼んだが、隠れて信仰するために仏教徒を装うなど工夫をしたために本来のカトリック教会の信仰スタイルから変化してしまった。明治になって禁教令が解かれてもカトリック教会に戻らずに隠れていた時代の信仰スタイルを守り通している信者を隠れキリシタンと呼び、カトリック教会に戻った信者を潜伏キリシタンと呼ぶ。

ユネスコが世界遺産登録するあたり、カトリック教会に戻った潜伏キリシタンだけを選んだ。それは恐らく外圧によって独自に進化した宗派というのは世界中に多くあるが、外圧が無くなった時に元に戻るという点を高く評価したのだろう。



その辺りの歴史は平戸島中央付近にひっそりたたずむ切支丹資料館が伝えている。

近くの高台には1924年に建立された田舎町には不釣り合いなほど立派なロマネスク様式の紐差（ひもさし）教会がある。

この教会の立派さと隠れキリシタンの辛い歴史の対比が何とも面白い。

■生月島

生月大橋は水色の塗装が見事な橋で、長さ 960m、1991 年に有料橋として開通し、2010 年からは無料化された。船でしか渡れない島に橋が架かることは住民にとって画期的な出来事だ。

だから島の人口は 2005 年の約 7000 人が現在約 9000 人と増加している。同じくらいの人口の島は東京都の伊豆大島だが、人口は減少している。ちなみに大きさは南北約 10km・東西約 2km で、伊豆大島の 1/6 程しかない。

人口増加は橋ができたことが大きな要因だが、果たしてそれだけなのだろうか。

潜伏キリシタンがカトリック教会に戻ったように、人々はいつか島に戻って来たいと思いで島外に出ていたのだろう。それほど島には魅力があるのだろう。ほんの 1 時間しか滞在していないが歴史も文化も自然も独特で濃厚なものを私は感じる。

島民の墓地の近くを通りかかったら興味深いお墓が目にとまる。通常の仏教の墓石の上に十字架が付いている。この土地独特なものだろう。申し訳ないと思いつつも、写真を撮らせてもらう。



カトリック山田教会はレンガ造りの教会でこの島のサイズに合ったコンパクトながら重厚な建物である。そうかと思うとその近くの高台には、高さ 18m という大きな生月観音が鎮座しているから不思議な組み合わせだ。

島の先端には大婆鼻（おおばえ）灯台がある。現地の看板は大バエ灯台となっているので大きなバエでもいるのかと思えばそうでもない。とにかく風が強いが、景色はなかなかのものだ。

対馬海峡に面している所以对馬や朝鮮半島も近い。ここに立つだけで歴史ロマンを感じる。

この最果ての小さな島には、何とも言えない魅力が詰まっている。

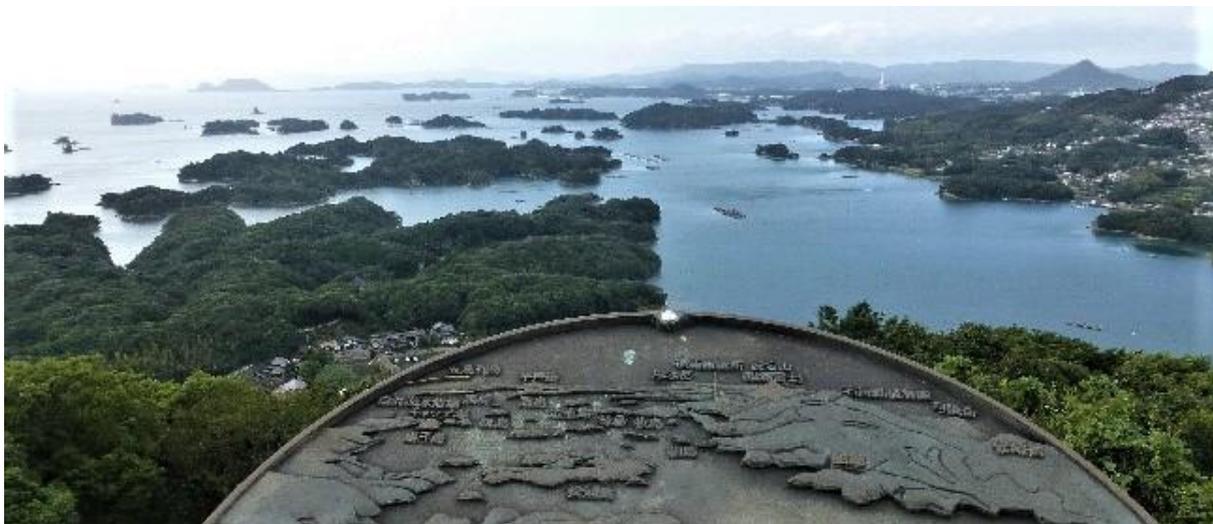
■九十九島（くじゅうくしま）

佐世保に戻って来る。九十九島という景勝地は知っていたが、能登半島の九十九湾と同じように「つくも」と読むと思っていた。それは現地に行って本物を見たことがないということをさらけ出したようなもので、今回は是非その絶景を見ようと展開峰という展望台に車を走らせる。

展開峰は標高 140m、大きな駐車場から展望台には歩いて 2~3 分、途中にはコスモスが咲く大きな花壇がある。いやコスモス畑といった方がいいかも知れないが、これも素晴らしい。

展望台への案内看板に書かれていた文言は「展望台からの眺望に自信あり」と書かれている。そしてその看板には嘘偽りはなかった。

私たちは直ちにそれを実感し、納得する。素晴らしい眺望で九十九島が綺麗に一望できる。



同様な風景は日本各地にあるが、ここは群を抜いていると言っても過言ではない。私には日本三景の松島よりも素晴らしいと思うが、全国的に有名になっていない理由が良く分からない。

■ ジャズと海軍の街

佐世保港のクルーズ・ターミナルに戻ると、私たちの船の近くには海上自衛隊の船が停泊しており、その船をバックに高校生がジャズを演奏している。地元の高校の軽音楽部で、指揮者は顧問の先生だという。

私たちの船の寄港イベントとして 2 時間おきに 3 ステージをこなしているというからありがたい。顧問の先生の話では佐世保はジャズの街として有名で、街の中にはジャズ喫茶が多いという。

私たちはしばらく演奏を聞いていたが、ジャズの魅力とともに高校生の笑顔やひたむきさに好感を持ち佐世保という街を何だか好きになり始めていることに気が付く。

高校生が演奏する後ろには海上自衛隊の船が一隻だけポツンと停泊している。ただ停泊しているだけでこれといった仕事をしている訳ではない。それが証拠に船に乗務している隊員たちは甲板から高校生のジャズ演奏を楽しそうに聞いている。

その光景を見ていて私はある推理をする。

佐世保は港街、しかも軍港の街である。その街の雰囲気伝えて歓迎するには、やはり海上自衛隊に一役買ってもらったのだろう。

ジャパネットの本社は佐世保にあるので、きっと影響力もある。海上自衛隊に頼んで風よけとジャズのステージを盛り上げるために停泊してもらったのだろう。今までの寄港地同様にジャパネットならばやりそうな気がする。

私はますますジャズと軍港の街、佐世保が好きになってきた。
おっと、忘れていた、九十九島も佐世保だ。



■お勧めスポット

どの船にも必ずお勧めスポットというものがある。この船の一番の私がお勧めするスポットは14階のビュッフェレストランの最船尾の席だろう。

最船尾なのでやって来る乗客が比較的少ない。3300人も乗っていると昼食時などはビュッフェレストランの席をとるだけでも苦勞する。

何よりも船の航跡を見ることができるのが魅力だろう。2つのスクリューが作り出す渦潮のような模様を見ながらのんびりと海を見ながら飲むビールやコーヒーは最高に旨い。

本日も私たちはそこに陣取ってビールを飲みながら航跡を見ている。

先日話をした親子3人が来た。この場所のことも教えていたので、探し出して来たらしい。

私は少し安心する。というのは、人間は好奇心や探究心があるうちは元気でいられる。

夕食テーブル仲間のT夫妻も現れる。T夫妻はお洒落でスマートな都会風おしどり夫婦とでもいうような、芸能人のような雰囲気を持っている。

旦那も奥さんも大のビール好き、夫婦水入らずの時間でビールを美味しそうに飲んでいるので声を掛けるのをやめておこう。

■コロッケのショータイム

物まね芸人「コロッケ」のショーが開催されるという。ジャパネットの戦略で前日まで秘密にしてのサプライズ開催だ。

1400人収容のシアターで3300人が同時に観るのは不可能なので、同じ内容のショーを2回開催する。

私たちが観るのは14時からで昼食を食べてから行こうと思い、シアター近くを通りかかると、開演2時間前にも関わらず50人くらいが並んで待っている。

コロッケの人気もあるだろうが、やはり船の上では暇を持て余す人が多い。そして無料で第一線の物まね芸人のショーが観られるのはありがたい。

さて、ステージはというと立ち見も出るほどの盛況で大盛り上がりになっている。ステージの内容は書きようもないが、隣に座った人は「このクルーズで一番良かった」と言っている。

■半田そうめん

翌日は徳島に寄港するので、半田そうめんの試食会があるという。会場のレストランは既に満席だが、4人掛けのテーブルの2席が偶然にも空いており、先客の夫婦に相席をお願いする。

半田そうめんは、徳島県つるぎ町の半田地区に伝わる麺であり、うどんと言うにはやや細い、そうめんと言うにはやや太いのが特徴の麺である。

次の寄港地の宣伝のために前日に乗船させて試食イベントを船内で催すというのはジャパネットならではかも知れない。クルーズも終盤で日本の味が恋しい頃で実に良いタイミングだ。

相席した夫婦と話しをすると、彼らもまたクルーズ初心者だ。

明日の徳島の予定を聞くと、レンタカーを借りて大塚国際美術館と渦潮を見に行くという。レンタカーの営業所が離れており往復の時間がかかることを気にしている。

実は私も当初はレンタカーを予約したが、目的地が大塚国際美術館だけで時間的余裕もないので路線バスで行こうとレンタカーをキャンセルした。この決断が果たして吉とでるか凶とでるか。

■徳島は渋滞

徳島小松島港に入港する。船は徳島市に隣接する小松島市の貨物船埠頭に接岸した。

ここから徳島市の市街地までは約20kmということで無料シャトルバスに乗って行くが、30分程で到着するはずが大渋滞で1時間30分もかかった。道が狭い上に車が多い、さらに通勤時間帯に重なっている。

これはレンタカーを借りなくて良かった。安心すると同時に昨夜の半田そうめんの試食で話した夫婦のことが心配になる。

目的地の大塚国際美術館にはさらにバスを乗り継ぐが、渋滞で乗り遅れて次のバスは1時間後になる。

その待ち時間を使って阿波おどり会館に立ち寄る。ここでもジャパネット優遇があり、クルーズ客のためだけに阿波おどりの特別実演をやってくれる。しかも渋滞で遅れた分の時間を繰り下げて実演してくれて、さらに通常実演より安い特別価格だ。

思わず私の頭にはテレビショッピングの例の言葉が浮かんでくる。「特別価格で〇〇、さらに本日だけの特別サービス！ジャパネットだから、ここまでやります！」

■大塚国際美術館

今回なぜ大塚国際美術館に行くことになったかというと、昨年末の紅白歌合戦で米津玄師が故郷の大塚国際美術館で歌いたいということで、この美術館から生放送された。私たちはその放送で見事な館内を見て「これは行くしかないね」という結論に至っていた。



この美術館は大塚製薬などの大塚グループの創業 75 周年記念事業で 1998 年に設立された。展示品は全て模造品だが、西洋名画 1000 点以上を全て原寸大で再現している。模造品といっても出来栄は非常に良い。

それを可能にしたのは大塚グループ内の大塚オーミ陶業という会社の特殊技術で、陶板に色や質感を複製するというもので、陶板なので 2000 年以上その色を維持できるという優れものである。その技術があるのでこの美術館を作ることになったのだろう。

長いバス移動の末にいよいよ入館し鑑賞するのだが、何しろ 1000 点もあるのでゆっくり見ている時間が絶対的に足りない。私たちの持ち時間は安全を考えると 1 時間しかない。

要所を選んで見て回ることも考えたが、どうせ模造品なので個々の美術品ではなく美術館全体のスケールを感じる方が大事だろうとひたすら巡ることにする。見学順路の全行程は約 4km もあり、1 時間で見るということはほとんど止まらずに歩きながらの鑑賞になる。

私は西洋美術に対して造詣はないが、海外旅行によく行くのでそれなりに美術品を見ることが多くあり、もちろん本物を見ている。

そしてここには私が見てきた有名な西洋絵画は全て展示されている。模造品であるが、私にはその違いは全く分からない。悲しいかな、見ているうちに全てが本物に見えてくる。

レオナルド・ダ・ヴィンチの壁画「最後の晚餐」も実物大で迫力充分である。本物はミラノの教会の食堂にあり、1977 年から 22 年間もかけて修復された。驚くべきことはここには修復前と修復後の 2 つ壁画が向かい合うように展示されている。こんな展示はここでしか見ることができない。(左が修復前、右が修復後)



そしてピカソの「ゲルニカ」、本物はスペインのレイナ・ソフィア美術館にある。高さ約 4m、横幅約 8m は圧巻だ。これはピカソの息子が出来栄えをチェックにきたという凄い。



ここは 1 日いても時間が足りないかも知れない。自分の西洋美術の知識や興味を整理するためにもう一度来たいと思いながら美術館を後にする。

■ 盛大な出港イベント

どの港でもレベルの差はあるが、出航イベントがある。いや釜山だけは何もなかったが、昨今の諸事情からだろうか。

ここ徳島での出港イベントが今クルーズで最も盛大であろう。クルーズ・ターミナル付近にお土産の即売所のテントが 30 店くらい出ている。その中には半田そうめんの販売テントもある。

阿波踊りの実演や指導もあってプロの踊子と乗客と一緒に踊っている。司会者の女性が「ヤットサー、ヤットサー」と阿波踊り独特の掛け声をかけている。

出港時間が近づき乗客が全員船に戻り、船からその阿波踊りを見ることになる。阿波踊りは踊り続けられ、女性の「ヤットサー、ヤットサー」の掛け声も続いている。時間が経つにつれてむしろテンションが上がって声も大きくなっている。

船の係留ロープが外れ、離岸する。埠頭の阿波踊りは更にエキサイトしていく。

それと同時に船からはお礼を兼ねて汽笛が 3 回なる。それに呼応するように埠頭の端から花火が 300 発くらい上がる。その後も阿波踊りは続き、掛け声も続いている。最後は「徳島に来てくれて、ありがとう」、「また来てね」と拡声器の声が届かなくなるまで続く。

このクルーズは後半になるにつれて徐々に盛り上がっている。ジャパネットのテレビショッピングのやり方だろうか、「これもあれも付けてこの値段、さらにお値打ち価格！今回特別・・・」

第五章 帰航

■海援隊

翌朝は横浜帰港、そして本日は往年のフォークグループ「海援隊」のサプライズのコンサートがある。私は学生時代にフォークソングのバンドを組んでおり海援隊は好きなグループの一つではあるが、その私にしてもこのグループの歌は3曲しか知らない。一体1時間のコンサートをどうやって繋げるのだろうかと思いつつも、コンサートを見に行く。

リーダーの武田鉄矢は今年70才、やや腰が曲がっているように見えるが元気そうで声も出ている。ある程度の元気を保ちながら、人生の苦楽を肥やしにしている武田鉄矢の姿は、このクルーズの乗客と重なることに気が付く。これもジャパネットの選定の上手さだろう。

コンサートは愉快で巧みなトークが主体、歌はトークの休憩のために挿入されるという逆転現象だが、あの独特の博多弁の話が観客には大受けで皆涙して笑っている。

隣の席で見っていた普段クールなT夫妻も興奮気味に「面白かった」を連発している。

コロッケにしても海援隊にしてジャパネットならではの催しだろう。それも客層に上手く合わせているから素晴らしい。何よりも観客の喜びようが忘れられない。

■最後の晚餐

明日は横浜帰港、今夜は最後の晚餐だ。いつものメンバーたちはアドレスを交換しあっている。

食事も進み、すると突然照明が暗くなり音楽とともにコックたちが踊りながら鐘や太鼓を鳴ならして入場してくる。音楽はもちろんイタリア音楽でイタリア国旗のような3色の布を身につけている。その一行は各テーブルを回りレストラン中央の高くなった場所に行き着くと、料理長の御礼とお別れの挨拶が始まる。

どの船でもクルーズの終わりに見る光景ではあるが、今回もまた「ありがとう」と大きな声を掛ける人がたくさんいる。私も惜しめない拍手を送る。

私たちのテーブルを担当するウエイターのジョンを入れて記念撮影をする。

彼の紹介を忘れていたが、フィリピン出身で38才4児の父で、1年のうち10カ月は間船に乗り2ヵ月間は里帰りの生活だという。

彼にはクルーズ中お世話してもらったので別れは感無量だ。最初はビールを注文してもなかなか持ってこなかったが、途中からは我々酒飲みメンバーへの対応を理解したようで素早い対応になり、最後の頃になると着席すると同時にビールが置いてある。彼も進化していると感心したことを思い出す。



夕食を終えてから「さよならパーティ」に出掛ける。それはいわばディスコパーティで1時間程行われ、船の若いスタッフ数人がお立ち台に立ち、参加した乗客はそれをまねて踊る。乗客にしてみれば阿波踊りに続いてディスコとは忙しい。

最初はM旦那が踊りに行く。そしてK奥さんが強引にK旦那の手を引いている。K旦那は最初渋っていたがしょうがないなという顔をして連れて行かれる。しかしその後M旦那は戻ってきたが、K夫妻は楽しそうにずっと踊っている。K夫妻は実直なお堅い職業というイメージの夫婦だが、朗らかで時々発するジョークが楽しい。定年後はDIYとガーデニングに明け暮れているというから、ディスコは彼らをそんな日常から解放してくれるのだろう。

ラスト1曲というアナウンスが流れる。それを聞いてM夫妻も、T夫妻も、そして私も踊りに行く。久しぶりのディスコは疲れるが、10日間を締めくくる汗は実に気持ち良い。

■横浜帰港

最終日の朝、横浜港に帰港する。

私たちはお気に入りの14階レストランの最船尾に陣取り、下船時刻を待っている。

横浜港の穏やかな海面に陽の光が反射してキラキラと光っている。私が座っている隣にはその最後の海の写真を撮りにくる乗客も多い。

私はその人たちに「良い旅でしたか？」と声を掛けると、皆同じように「最高でした」と返ってくる。

キラキラ光る海を眺めながらつらつらと考えることは、ジャパネットはクルーズを変えるかも知れないということである。

春夏計6回もクルーズ初心者ばかりの日本人を3300人も集めることは凄いことだ。

日本はクルーズ後進国である。旅行人口や経済力からして日本のクルーズ人口は世界に比べてあまりに少ない。

日本人は長い休みを取る習慣がないとか、船旅は時間を持て余すから苦手だとか理由はいろいろ言われるが、やはり本当のクルーズ知らないことが大きな要因だろう。中には北海道や九州に行くフェリーをクルーズという人もいるくらいなので推して知るべしだろう。

今回のクルーズに乗った人たちはその違いを間違いなく理解したはずである。

今まではクルーズ後進国でも、クルーズ人気が開花しクルーズ人口が増加することを、私は心より歓迎したい。

尚、日本のクルーズ事情については「豪華客船の旅 2019」の最終章で書いたもので、詳細はそちらを参照していただきたい。

■旅の記録

実施は 2019 年 9 月 30 日（月）～10 月 9 日（水）、9 泊 10 日、総費用は 2 人で約 42 万円。

正確にはクルーズ代金は 1 人 169800 円（内側船室、アルコールやチップ含む）になる。

その他に租税、手数料、港湾費用、出国税が 1 人 30000 円必要で、合計 199800 円、2 人合わせて乗船前にジャパネットに 399600 円を支払った。

以下実際の行程及び現地で支払った費用を記す。尚、寄港時の昼食が入っていないのは船内で食べたか、もしくは昼食抜きにした。これは寄港時間の有効利用でお勧めしたい。

- 1 日目 横浜元町中華街まで交通費のみ発生、無料シャトルバスで大黒埠頭、乗船し 18 時出港
- 2 日目 終日クルーズで費用発生なし
- 3 日目 港から函館駅まで往復は無料シャトルバス、
ベイエリアを散策し函館の市電乗り継ぎ合計 440 円×2、谷地頭温泉入浴料 320 円×2
この日の費用 2 人で 1520 円
- 4 日目 港からレンタカーで、鶴ノ岬海岸、ゴジラ岩、男鹿水族館 GAO、入道埼、
なまはげラインを通り、なまはげ館、寒風山、そして港にもどる
レンタカー費用 4050 円、ガソリン 1450 円、なまはげ館入場料 550 円×2
この日の費用 2 人で 6600 円
- 5 日目 台風回避のため終日クルーズで費用発生なし
- 6 日目 韓国釜山のクルーズ・ターミナルを訪問するも費用発生なし
- 7 日目 港近くでレンタカーを借り平戸島から生月島、塩俵の断崖、大バエ灯台、ガスパル様、
生月観音、カトリック山田協会、平戸島に戻り春日の集落、切支丹資料館、紐差教会
九州本土に戻り九十九島パールシーリゾート、展開峰、レンタカー返却し港を散策
レンタカー費用 4400 円、ガソリン 1346 円、キリシタン資料館 200 円×2
この日の費用 2 人で 6146 円
- 8 日目 終日クルーズで費用発生なし
- 9 日目 徳島市中心街まで無料シャトルバス、阿波おどり会館と大塚国際美術館を見学
阿波おどり会館 600 円×2、路線バス 720 円×2、大塚国際美術館 3300 円×2
この日の費用 2 人で 9240 円
- 10 日目 9 時横浜港帰港、無料シャトルバスで桜木町駅着、以降自宅までの交通費のみ発生